

時々考えることがある。自分のことじゃなくていつも楽しそうに笑っている彼がなんでもなんにも笑顔絶やすることがないのかが私には考えられてしまう事案になっていることに彼は気付いていなくて、私からは何も言えないのが少しだけ悔しいのはきつと気のせいじゃない。だからだろうか、私がこんなにも写真を持っているのが酷く情けなくなってしまう感情に苛まされてしまうのは、やはり、彼がよくわからないからだろう。

今日は晴れていて、綺麗な蒼空が雲の動く様をじつと見つめていて、隣にはお陽様に感謝を捧げている、海雲たちは何を思っ、この空海を泳いでいるのかはさすがの馬鹿な私ではわからない。いつもそんな風に笑顔を作っているのが、彼だけだと思っていたことを私は知っていたが、まさかこんなところにも彼の仲間がいるなんて思ってもみなかったがそれも時々楽しみにしておこうかとよくわからないことを考えてしまうの無理はないのだろうか。そして鳥の大群が群れを維持して、空を気持ちよさそうに飛んでいる姿は私もわからないことを考えてしまふのを止めなさいと言っているぐらいに気持ちよさそうだった。

綺麗な晴れている天気はこうして、私と彼のことをじつと見つめてくれたのが嬉しくて、少し、元氣も出そうと、一緒に暮らしている彼の横顔を見れば、ぽつんと一滴の涙が零れ落ちていて、何を意味しているのかわからないのが今でも考えてしまう癖になっっているだろうと、彼はそれが嫌なんだと始めて気が付いた私。どっちにしろ、私は人に簡単に迷惑をかけてしまふなんて情けない。だから少しは考えることを止めてみようと思う。空を見つめると、ど

こかで知っている姿が見えたのは気のせいだろうか。

空を飛んでいるのは鳥以外に、人の姿があつた。多分、ヘリコプターから落ちていくあの競技の名前を思い出すのは難しいが、やはり止めてみる。そしたら彼は一緒に空を見つめてくれた。

「なんかさ。ずっとこんな日々が続いていけばいいのに、つて思うんだよね」

空の中で海を見つめるかのような感覚は私だけなのだろう。一人だった時のことを忘れている彼は私にいつもついてきてばかりだった。つきつきりでいたくせに今では隣同士の感覚を当たり前にして、私を愛しているのかどうかすらもわからないが。

「そうなの。私は別に何も思わないけど、拓が思うんならいいんじゃない」

「それ、卑怯」

拓は薄く微笑んで、また私から視線を外し、空を見上げている。

いつものように日々を過ごしていく中で楽しいことが続けばいいなんて子供みたいだなんて思える、そんな至福の時間はあつという間に過ぎていくけど、私の感情に抜け落ちた一つのそれを私は覚えていくせに手に入れることが難しいと思つたのだ。思うだけならまだマシだが私にはどうやら、昔から、ある能力が備わっていると教えてもらったことがあつた。確か、お母さんだったろうか。

「あんたには創る能力があるのよ。大切にしなさい。それは私の家系の女の子にしかないんだから。なんでも創れる。でも」

その時の厳しい視線は私のことを諫めるかのような、もしくは優しくだったかはもう忘れたけど。

「忘れたら、時を失うのよ」

……。私はいつもここまでの記憶しかないのだ。何を手にすればいいのかはわからないけど、拓と暮らすうちに日に日に失っていくその能力をどこで思い出せばいいのか、どこで使えばいいのか、私にはどうすればとただただ混乱するだけ。酷く酒に酔ったかのような、陶酔感と酩酊感が必ず訪れる。綺麗事なんて嫌だっと思っていた自分がきつとどこでも自然に笑うことでいつまでも世界の中を回りに回ってしまうのがいつも考えてしまう。私の悪い癖だ。

どこか遠く水平線の向こう側に、綺麗な夕焼けを見つめて、私は瞳の色を深く刻み込んだ橙いろ色素は私の記憶に新しいことを教えてくれる。とても大切で、とても危うげで脆く、私は涙を流す。橙。その色が自分の空色に映りこむから、いつまでも海辺が夕焼け。私を覚えている人はいないのだから、きつとこれからも涙を流すことはお母さんを思い出すとも仕方のないことなのかかもしれないが私の記憶と記録書に残されている、私の祖先が遺したある古文書に、一言あったのを確かどこで見つけたんだったか。

「——なんだよ」

やはり思い出せない。鍵がかかっている宝箱の中身のようで、何度も様々な思い出という鍵でいじつてしまうのはやはり私の秘密を知っているからだろうか。誰が？ わかっている。お母さんに違いない。私のことを大切にしてくれているのなら教えてほしかったけどただ単純に私を必死に護ってくれた時が情景として浮かぶ。

城下街に火がまかれ、火災の中、村の中にいたクーデターを起こした人物を私は覚えている。私の家系を滅ぼそうとした、ある呪詛師が私の家にも火を撒いたときに轟く声が聞こえて、関の声を大きく震わした。お母さんの胸に抱っこされている、その時の記憶――。

今日もまた楽しい日々が続けばなんて思いながら朝ごはんを二人分作って、味噌汁を必ず、持っていたお母さんの水筒を私は何気なくその中に入れて、栄養補給としてもつたないが入れておくことによつて、いつでもお母さんのことを思い出せ、記憶に封印されている自分の世界のことを調べなければとにかく、やらないといけないのだから。

「ほら、拓。ご飯出来たよ」

「あ、ああ。なんか嫌な夢見てね」

「どんな夢？」

「なんだか、空を飛んでいるそんな夢」

「久しぶりにみた隣人たちの夢」

二人で食べてしまった朝ごはんの片づけは拓に任せる。いつも食べてばかりだから、綺麗な洗い方をしてはくれないが不器用なりに磨いてくれるから楽と言えば楽なのだが、もう一度スポンジから教えてやり直すことになるのが苦と言えば苦なのだ。意味がないと言ったら早いのもかもしれない。

私はとりあえず、自分の姿を鏡で見て、綺麗な姿をしていた自分のことを思い出して、なるべくその時に合わせた服装を心がける。綺麗な瞳に映っている自分の瞳を何をしているのかを確認させて、これから何をすればいいのかがまだわからないがそれでも旅の準備にしていく中で、綺麗な服を着ている自分が可愛いなんて思っちゃうのは仕方ないことなのか、それとも拓に言わせるためだけにここににいるのかもしれない。何を思っているのかわからないけど、自分でも酷く混乱しているのがずっと考えていることなのだから少しは大変だと宅にも伝わってほしい。

シンクで水流の音が聞こえだして、綺麗な歌声が聞こえる頃、今はお昼様の出番で、鳥の鳴く声と蟬の鳴き声が私の耳に入り込んで澄んでいる自分の感情が私の中にある心を癒してくれる。まだ拓には言っていない、旅のことはしばらくしてから伝えよう。今はとにかくお化粧を。水流が一定のリズムで楽しんでいるかのような水音が鳴り響き、その音に合わせて鳥がびる

びると鳴いているのが美しく聞こえてくる。綺麗な音だ。私は一人思う。綺麗な人には綺麗なものが似合う。きっと私はそんな人生だったから美を探索することはどこまでも高尚なものだと思つていたのは馬鹿なものだと知つていたから、どこにでもいるそんな馬鹿な人だと思われたくはないため、いろんなものが心に残つているからこそ私に綺麗事を絵に描いてみてもなぜか自分のことがよくわかつてしまうことがあるのだから、一度、楽しい夢を見ながら、筆と紙を持つて、自分の世界を構図にして理想を書いてみるのも良いのかもしれない。私はやはり考へてしまうのだから、これはこれで自分のことを思つていたことに何よりも楽しいのだと知つているのはどうしても笑つていられるのだということに落ち着くからだろうか、知つているのが自分以外に拓にも伝わつてほしくて、一人涙を流すことが時々あつて、笑つているのにもやはり、私は何もできない。自分のことを考へてみたくて、知つていることを真実の中で涙と等価交換してみたくて、嬉しくて、人生の中で心は大切な物。……！

「あつ」

拓に気づかれていないようだけど、私は記憶の封印にはもしかして関係があるのでは？ と勘ぐつてしまう。私の悪い癖の思考癖が心を想つてすることに気づかせないようにしているのだと関係があるのではないのか。もしかしたらそれだったら、ここから窓ガラスを開けて見える森の中に秘密の寝所があつてそこで暮らしている、少年に尋ねてみようかと思つた。

その少年はお母さんがいた頃からいたらしく長年のこの国のことに異様に詳しく、様々なことを知っているのが私には強い味方になっている今、現在。これから私の運命が歯車を回して何度も軋む音が鳴りだしたようで私は少しずつ知っていく。

「どうしたんだ？」

拓が手をタオルで拭きながら、テーブルに座っている私に話しかけてくる。

「いや、何にも。ちよつと今日、外に出るから、拓はどうする？」

「俺はそうだなあ。まあ、家でのんびりしておくよ」

城下街に行つて先に情報収集をしてから少年に会う。まずはそれからだ。

時よ

理を識らずして

人を知り 世界を知らず

涙を流す それが故に

人のことを知る

何れにしろ

涙を探しているから

私は私でいられる

記憶に薄く張り付いている世界のことを絵に写して綺麗に描くことを望んだはずだった。私の想いは消えゆく世界と共に在ったのか。私にはもうわからない。だけど知っている。私を護っていたお母さんの姿だけは。私がいなければこの世界は崩壊するのかもわからないけど、それでもいつしか大変な目に遭ってしまうようなことが私には感じられた。記憶と記録をどこで見つけたのか、お母さんに聞きたかった。ある書物にその存在を教えてくれるものがあるという記憶まで。

どこで見つけたのかはわからないけど、私は私の記憶をいじってみるのはどこにでもいる人のようなことを終わっている遊びみたいにしていることが少しだけ虚しく感じた。